

さて、今回はカメラ・オブスキュラについてご説明しましたが、続いて今回はヨウ化銀を塗った金属板を露光させてイメージを直接、板に刻み込む**ダゲレオタイプ**についてです。企画展「これからの写真」では、新井卓さんが**ダゲレオタイプ**を使った作品を出展しています。



↑新井卓《2012年1月16日、新田川、南相馬市》2012年

光の当て方や眺める角度によって、見え方が変わるのが面白いですね。驚くほど細かいところまでしっかりと写っているところも特徴です。新井さんの詳しい制作過程は、10階ショップのモニターにて紹介しています。

さて、このダゲレオタイプ、もっとも古い写真技法の一つとされています。カメラ・オブスキュラ等に写し出される像を何とかそのまま固定したいと考えた多くの人々が試行錯誤を繰り返し、ついに、フランスのルイ・ジャック・マンデ・ダゲールが、感光性を持つ金属板の露光、現像、そして像の定着に成功します。1839年にダゲールはこの技術をパリの科学アカデミーに報告し、この技法は「ダゲレオタイプ」という名前で世に広まりました。



↑テオドール・モーリセ 《ダゲレオタイプ狂》1839年

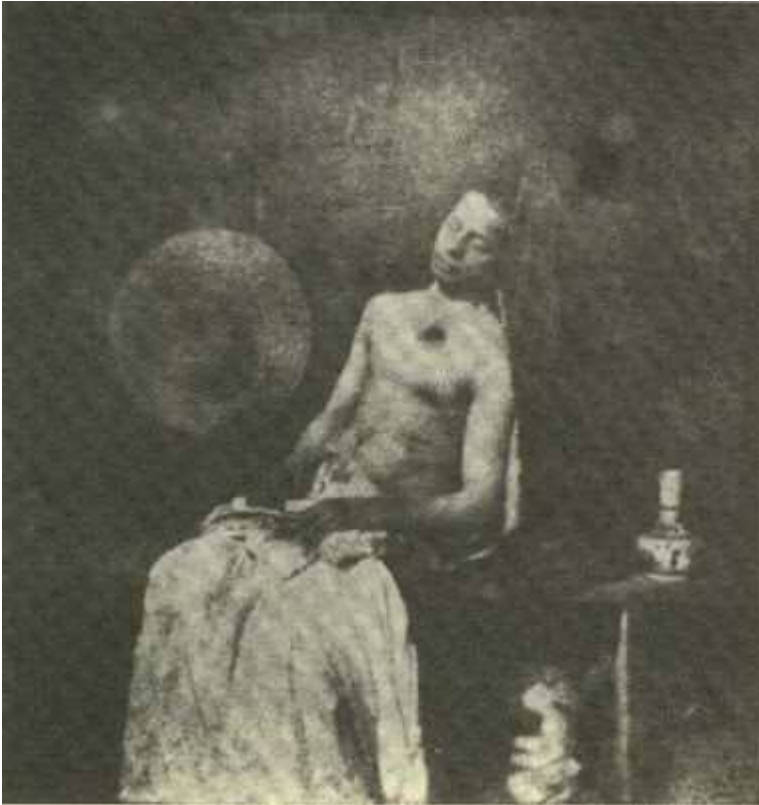
Henisch, Heinz K., POSITIVE PLEASURES (The Pennsylvania State University Press, 1998) より転載

上記の絵からも伝わるように、ダゲレオタイプは熱狂的に社会に受け入れられ人気を博したようです。

ダゲールは早くも同年に市販用のカメラも発表し、名誉と報酬を手に入れました。

しかし、実際のところ、ダゲールただ1人が写真技術を発明したわけではありません。同時多発的に各地で写真技術は追求され、少なからぬ人々が一定の成功をみていました。例えば、イポリット・バヤールはダゲール同様、1839年には紙陰画による写真技術の発明に至ります。しかし、ダゲールのダゲレオタイプが公式に認められた後だったため、バヤールはダゲールほどの評価を得ることはできませんでした。

そこでバヤールは翌年、抗議の意味を込めて一風変わったセルフ・ポートレートを撮影、発表します。



↑イポリット・バヤール《溺死者に扮したセルフ・ポートレート》1840年

ジェフリー・バッチェン『写真のアルケオロジー』（青弓社、2010年）より転載。

自分の発明が軽視されていると悲嘆したバヤールは、自ら溺死者に変装して写真を撮り、それを科学アカデミーに送ったのでした。すごい当てつけ……。写真技術誕生からわずか1年、演劇性、自意識、ロマン主義、宣伝効果など写真の様々な力が（非常に奇妙な形で）すでに発揮されているようです。

(F.N.)